

科学・社会・政治の交錯領域へ

——「ジェンダーをめぐるコミュニケーション齟齬」をめぐる——

江原 由美子

本研究報告書は、「ジェンダーをめぐるコミュニケーション齟齬」を、主題としている。この主題の意義を、最初に概略しておくことにする。

まず、本報告書における「ジェンダー」という用語の使用法について述べておこう。本報告書では、「ジェンダー」という用語をいくつかの意味で使用している。概念用語使用におけるもっとも基本的な区別は、何かを表現するために当該概念を使用し概念使用法自体には注意を向けない即自的使用と、その使用方法自体を対象化する対自的使用の区別であろう。また、「ジェンダー」という概念用語は、まずは性科学やジェンダー研究などの学問において使用され始めたが、一定程度の普及を見たのち、学問の世界を超えて、一般的市民によっても使用され始めている。即自的・対自的という区別と、学問的・一般的という区別を重ねると、①学問的対自的使用、②学問的即自的使用、③一般的対自的使用、④一般的即自的使用の4つを区別しうる。

この区別に従えば、本報告書の主題「ジェンダーをめぐるコミュニケーション齟齬の研究」では、「ジェンダー」という用語を、この使用法のいくつかを含みこむ形で使用していることになる。たとえば、須永氏と左古氏の研究における「ジェンダーをめぐるコミュニケーション齟齬」とは、まさに「ジェンダー」という概念用語をめぐるコミュニケーション齟齬が問題になっており、そこでは学問世界で即自的に使用されてきた「ジェンダー」という概念用語の使用法を、対自化する研究視点が存在する。他方、林原氏と鶴田氏の研究においては、「ジェンダーをめぐるコミュニケーション齟齬」は、基本的には、研究者として「ジェンダー」という概念用語によって記述できると考えた社会現象としてのコミュニケーション齟齬が主題であり、またその意味では、両者の「ジェンダー」という概念用語の使用法は、学問的即自的使用(②)にあたる。無論、両者とも、社会現象の中で人々が「ジェンダー」という用語を使用して行われている相互行為にも触れており、その意味では、④の一般的即自的使用法も、含まれる。

本報告書における「ジェンダー」概念の使用法がこのように複雑なのは、本報告が扱おうとする研究対象領域が、「科学と社会」の交錯領域であるからである。「ジェンダー」は言うまでもなく、学問の世界において生み出された概念である。女性学やジェンダー研究は、当該社会において自明とされていた「男らしさ」や「女らしさ」等の性別にかかわる観念が、様々な社会事象と関連しながら当該社会において社会的に構築されてきた側面があることを明らかにし、性別にかかわる社会現象を明らかにする視点を明確にするために、「ジェンダー」という概念を生み出した。この概念が学術世界において生み出された経緯や日本社会において定着していった状況については、須永論文に詳しい。しかしこの概念は、学問の世界に留まっていなかった。そもそも女性学やジェンダー研究は、「女性解放」や「女性の地位向上」といった問題関心から、既存の学問では問われないままになっていた様々な社会問題(≒女性問題)を解明するために生まれた学問であり、その意味で強い

実践的志向を持っていた。それゆえ、女性学やジェンダー研究からは、「開発とジェンダー」「ジェンダー予算」「ジェンダーエンパワメント指数」など、社会的経済的政策に影響を与えるような「ジェンダー」に関わる様々な概念が提起されることになった。それゆえ、学者以外の多くの人々もまた、「ジェンダー」という用語を知ることになり、またそれを使用するようにもなったのである。

要約すれば、このような状況が、「ジェンダー」という概念が、学問的科学的言説領域と、一般市民の言説領域双方に流通する状況を、生み出した。それゆえ、「ジェンダー」という用語をめぐる、その使用に対する批判的政治状況が生じると、学問的科学的言説領域と市民的言説領域双方に影響を与えることにもなった。つまり、「科学・社会・政治」の各領域が交錯し、それぞれ相互に影響を与える状況が生まれたのである。本報告書が扱う研究対象は、このような交錯の中で生じているコミュニケーション齟齬であり、あるいはそのようなコミュニケーション齟齬を生み出している要因の解明である。

このような研究主題を設定したのは、ジェンダー研究におけるこの主題が持つ重要性ゆえであることは当然として、それ以外に、現代社会の一つの特徴を示す出来事としても、重要性を持つと思うからである。現代社会における様々な社会問題は、その社会問題を解明したり記述したりする様々な「科学的・学問的概念」と密接な関連性を持つ。そもそもその社会問題が学問的・科学的に、その用語を使用して提起される場合が多い。たとえば「地球温暖化問題」「気候変動問題」「パンデミック問題」「ドメスティック・バイオレンス問題」等、たくさんの例示が可能である。これらの問題は、社会問題化に、特定の学問からの視点による問題の記述化が深くかかわっている。そうした記述化が、従来社会問題化されなかった事象が社会問題として認識されることを可能にしている。けれども、従来の言説空間を超えて流通するこうした言説は、学問的科学的領域・社会的領域・政治的領域等、多様な言説空間における異なる立場からの批判をも、引き寄せることになる。そもそも、学問的科学的領域・社会的領域・政治的領域等は、それぞれの言説空間を維持するために固有のコミュニケーションルールを装置化している。しかし、そうした領域を超えて交錯するコミュニケーション的相互行為は、コミュニケーション齟齬が生じる確率を高めることになるだろう。

「ジェンダーをめぐるコミュニケーション齟齬」という現象は、現代社会において頻発すると思われるこのような社会現象の、一つとして位置付けることが可能である。「ジェンダー」という概念は、そもそも「ジェンダーに関連する社会問題」（その多くにコミュニケーション齟齬が含まれている）を明らかにするうえで重要な概念として登場したのだが、またその概念用語自体社会的相互行為の中に再帰的に投げ込まれ、社会的対立を背景にしつつ、政治的対立を生み出した。そしてこのような政治的状況はまた、学問的世界の中にも影響を与えるとともに、そもそも「ジェンダーに関連する社会問題」の解明と解決（をめぐる自然史）にも影響を与える可能性がある。本報告書は、このような「科学・社会・政治」の交錯領域に生じている「ジェンダーをめぐるコミュニケーション齟齬」を、研究対象としているのである。